

始年 末 松 岩寺の年 禍の

コロナ禍のお正月、新年に寺へお参りされる方へ、例年とは異なる御札を用意しました。中央の写真の御札です。「疫病消除」を強調した外紙に包まれて、毛筆で書かれているのは「床浦大明神」の五文字。「とこうらだいみょうじん」と読むらしいけれど、それって、ナンだ！。次のようないきさつがあるらしい。

最近、京都の古美術商が、長さ四五センチ、幅が十一センチの細長い墨跡を表装した軸物を手に入れます。なだらかな行書で墨書しているのは、

峨山慈棹禅師（がさんじとう 1727～1797）。一般的

には名の知れた禅僧ではありませんが、この方とそのお師匠さまである白隠慧鶴禅師（はくいんえかく 1685～1768）がおられなかったら、今の臨済宗はもしかしたら存続していなかったかもしれない、と思われるほど重要な禅僧です。

そんな大切な方が書かれた墨跡とはいえ、意味不明な五文字の軸物を手に入れた古美術商は、文字の背景を調べていくうちに、白隠禅師の年譜に行きつきます。白隠禅師は八四歳で亡くなりますが、その年の出来事です。

夢に一人の老人が現れて、ほっそう 疱瘡にかからないお

札をくださいと言いました。当時疱瘡がはやっていたので。禅師は、そんなお札は知らぬと答えました。老人は、「床浦大明神」の五字を書いてください、そのお札を朝晩崇拜すれば靈験があるというのでした。禅師は夢から覚めて、床浦大明神のお札を授けるようになった、と。

「床浦大明神」とは、聞きなれないお名前だけど、現在の日本でも数カ所の神社に祀まつられているようですし、古くは聖武天皇が疫病退治を床浦大明神

に祈るよう薦めたという記録があるようです。

それにしても、「禅僧が明神さまのお札を作るなんて」といぶかしく思う方もおられるでしょう。明治初年までは

神仏習合で、神社のなかに寺があり寺の中に神社があつたのです。

残念なことに白隠筆の「床浦大明神」は残存してないようですが、弟子の峨山筆が、二百年以上の時空を越えて、禍の時代に姿を現してくれました。複写し、御札に仕立てお配りします。

家庭のよく目立つところに貼ってお祀まつりし、「今是我慢がまん」と、自己も他者も大事にする、自愛の年の道しるべにしていただければ幸いです。